
家族

M川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族

【著者名】

2021F

【作者名】

M川

【あらすじ】

とりあえず皆死んでもらいましょってんで鉈を振りかぶって僕の祖父であるところの大熊猫太郎（73歳）が襲い掛かる。先陣を切るのはいつも祖父だ。僕は戦う。家族は戦う。

とりあえず皆死んでもらいましょってんで鉈を振りかぶつて僕の祖父であるところの大熊猫太郎（73歳）が襲い掛かる。先陣を切るのはいつも祖父だ。

祖父のターゲットは、相手家族の娘夫妻の末っ子である北条タカヒト君（10歳）で、タカヒト君は「うわわわ」と慌てた声を上げて逃げ出す。逃げるタカヒト君の後頭部に祖父は鉈を振り下ろすが、目測を誤つたらしく空振り。ヒュインと風を斬る音がしただけで、タカヒト君、無傷。

ああ惜しいと僕は舌打ちをする。舌打ちは舌のあるものの特権だ。それがどうした。などとどうでもいい思考に気を取られた隙に、何か異様な物体が僕めがけて飛んでくる。

それは、頭に鉄鍋を被つた相手家族の娘夫妻の夫の方の、北条ハルキ氏（42歳、婿養子）で、僕はハルキ氏の砲弾のような鉄鍋頭突きを腹部に喰らつて3メートルほど後方に吹っ飛ばされ、ベキベキッと障子を破つて庭に転がり落ちる。決して軽くないダメージで、二つの腎臓がじんじんする。洒落じやないよ。いや、洒落じやねえって、マジでマジでマジで。

僕は体を起こすと、ズボンのベルト部に差し込んだ果物ナイフを3本抜き取り、片膝を立てた状態で立て続けにハルキ氏に投げつける。1本目、ハルキ氏は鉄鍋頭を突き出してそこにぶつけて防ぐ。が、別の軌道で迫る2本目がハルキ氏の右肩にトスッと突き刺さり、その痛みで身を捩つたことが幸いして3本目はギリギリでかわされる。

まあいい、1本は刺さったもんね。ざまあみせらせ。と悦に入つてゐると、ハルキ氏は右肩のナイフを抜き、僕に投げ返してきた。真つ直ぐに。眉間めがけて。はは、死ぬ。ははは。

でも死なないのは、僕がマト何とかツクスつて映画の主人公のネ何とかつて人ばりに上体を仰け反らせてそれを避けたからで、もともと片膝を立てた状態だったから、それはもう僕は仰向けに倒れるしかなかつた。その拍子に、後頭部を、植え込みの縁の石に打ち付けて鼻の奥が焦げ臭くなるような、非常に不快な痛みを受ける。

先ほどまで僕の頭が存在していた空間を、果物ナイフが通過し、その後ろに朴念仁の如く突つ立つっていた柿の木の幹にシュカーンと突き刺さる。

仰向けになつた僕の視界一杯に、雲ひとつ無い青い空。今日は良い日だ。んなわきやあない。

カキンとこゝは甲子園ですかつてくらい軽快な打撃音が鳴つた直後に「ぐおうあ！」とハルキ氏のやや奇を衒つたとしか思えない慟哭が聞こえる。

依然として仰向けな僕だから、ハルキ氏に何があつたのかが分からぬ。分かりたい。そんなわけだから僕は仰向けを止めて、体を起こす。物事には順序つてものがある。面倒くさい。

ハルキ氏が頭を抱えて蹲つてゐる。その後ろに立つてゐるのは僕の妹であるところの大熊沙希（17歳）で、彼女は両手で金属バットを持つてゐる。あれで殴られたのであればいくら鍋を被つたハルキ氏であつても、一時的にしろ戦闘不能になる事は間違いないだろ

う。 いのままとじめを差しておぐのも手だと思ひ。 まあ、 その辺は沙希に任せよう。 仕留めたのは沙希なんだから。

僕は柿の木に刺さつているナイフを抜き、 ベルトとズボンの間に差す。 残りのナイフは合計4本。 あと2本、 どこかに転がっているはずだけれど、 わざわざ探すのも億劫だ。

背中の土ぼこりを適当にババッと払つて、 家の中に乗り込む。

北条家の内部は、 それはもう死闘が繰り広げられていた。

相変わらず祖父は鉈を持ってタカヒト君を追い掛け回している。 タカヒト君も祖父の追撃を「のわわっ」とか言いながら器用にかわしているが、 いつまで逃げていられるもんかね。 祖父がもう、 滅多矢鱈に鉈を振るつもんだから、 食器棚とかお仏壇とか間仕切り壁だとかがもう、 惨憺たる有様になつていて。 まあ、 いじは北条家だから別にいいけどね。

僕の父である大熊悟（46歳）は、 相手家族の娘夫婦の娘の方でありハルキ氏の奥さんでもあるところの北条マリネさん（38歳）と、 マリネさんの娘でありタカヒト君の姉でもある北条ミキちゃん（14歳）と戦っている。 父は両手に二丁の草刈鎌を構えていて、 相対するマリネさんの武器はフライパンで、 ミキちゃんは見たところ素手で武器を携帯していない。 これなら例え2対1だからといって、 父が負けるとは思えない。 僕が加勢する必要は無いだろう。

「ぐええ」と、 おたまじやくしの成れの果てが握りつぶされるような声が聞こえたのでそこを見やると、 僕の祖母、 大熊和子（74歳）が、 仰向けになつて呻いている。 祖母に馬乗りになつて荷物梱包用のビニール紐でその首を絞めているのは、 ミキちゃんの妹であり

タカヒト君の姉でもある北条ルナちゃん（12歳）。じつやいがん、このままだとお婆ちゃんが死んじゃう。おばあちやーん！

つてんで僕はルナちゃんに飛びかかって祖母から引き剥がす。もつれて「ロロロロ」と一人で床を転がる。最終的に壁際で止まり、僕がルナちゃんの上になる形になつた。おお、マウントポジション！

さて、どうしてくれようかしらと、意図せずにニヤニヤしてしまつ僕をレミーボンヤスキーバリの飛び膝蹴りで、吹っ飛ばしたのはしかし僕の祖母。なにをせらすの、おばあちゃん！ で、どうするのかと思つたら、僕の代わりに祖母が馬乗りになつた。反撃開始ということらしい。なにも蹴り飛ばすことないじゃんよ。あれか、「ここはあたしの獲物じや手を出すんでねえぞ！」とか、そういうことなのか。

訖然としない何かを感じつつ僕は立ち上がる。祖父とタカヒト君の追いかけっこは未だ続いている。置がもうボロボロ。壁もボロボロ。縁側では、妹がハルキ氏の頭を鉄鍋ごとカクン殴つている。ハルキ氏は殴られるたびに「あひつ、あひつ」と妙に嬉しそうな奇声を上げていい辺り、相当重いダメージを脳に負つたのか、それとも真性のマゾヒストなのか。なんとなく後者に2000点。

そんな間にも、僕の母、大熊縁（39歳）は相手家族の当主でありタカヒト君の祖父でもある北条キジムナー氏（87歳）と戦つている。若さでこそ母が勝つているものの、しかし母の武器は竹箒であり、キジムナー氏の武器はチーンソウだ。一応説明しておくと、チーンソウってあれね、13日の金何とかつて映画のシリーズに出でくるジェイ何とかつていう怪物がもつてるような、あれね。

竹箒とチーンソウ。戦力に圧倒的な差があるじゃないですか。そりやないつすよ、酷いじゃないですか。大人気（『だいにんき』じゃないよ、『おとなげ』だよ）ないつすよ、キジムナーさん。大体、なんでそんな名前なんすか。いやま、どうでもいい事だけもさ。そんなわけだから、僕は母に加勢することにした。

挨拶代わりに腰のナイフをショットと投擲。

キジムナー氏は、年の割りに俊敏な動作でチーンソウを振り、バチッとナイフを弾き飛ばす。あわよくばこれで決めてやろうとう一撃だつたので、あんなにあっさり防がれてちょっとびりショックな僕だつた。僕の本気なんてそんなもんさつてセンチメンタルな気分に浸りたくなつたけど、残念ながらそんな暇はねえのね。

僕は両手にナイフをとる。左手はオーソドックス、右手は逆手に構えて。アイドリング中のチーンソウのエンジンは、どるどるると不躾な音を鳴らしている。僕は床をドンと踏み鳴らして威嚇するものの、キジムナー氏は無反応。肝が据わつていらっしゃる。キジムナー氏はブイイイイと刃を回転させて僕たちに威嚇を返していく。正直、怖い。だつてこのお爺ちゃん、無表情なんだもん。

祖父とタカヒト君は依然として鬼ごっこの中。祖父の「ま～あて～え」という掛け声とタカヒト君「うきやきや」という嬌声を聞いていると、お前ら最早楽しんでんじゃねえのという疑念が湧き上がらないでもなかつた。それでもそれなりにシビアな祖父なので、そんな掛け声の最中にも鉈はブンブン振り回しているらしく、色んなものの残骸がこちらにも飛散つてくる。

その中に、祖父の脳天唐竹割りを喰らつて真つ二つにされたダルマが転がつていた。僕はつま先を引っ掛けちょっとと真上に跳ね上

げ、リフティングの要領一度膝にバウンドさせてから、中学時代に黄金の右と特に恐れられはしなかつた右足でダルマを蹴り飛ばす。キジムナー氏目掛けて。

キジムナー氏が回転するチョーンソウの刃でダルマを受けた為、ダルマは惨め、バキバキと碎けてしまった。が、それは想定の範囲内ですよ。ダルマに気を取られた隙に、僕は右手のナイフを投げつける。キジムナー氏の脇腹をジャリッと掠つて床に落ちる。傷はついたはずなのに、顔色一つ変えないキジムナー氏はやはり凄い。

母が一步前に出て竹箒を突き出すと、キジムナー氏はそれも刃で受ける。パンパンパンと竹箒の先端が切り裂かれて、小片が飛散る。それがキジムナー氏の目に入つたらしく、初めてキジムナー氏が目を瞑つて顔をしかめた。

大事な大事なアタックチャンスつてんで僕はナイフ片手に飛びかかるうつするが、不意に背中が熱くなつて力が抜けてうつ伏せに倒れこんだ。なんだなんだなにがあつたのかしらとパニックになる。そして、数秒送れて激痛が走る。左手で背中に触ると、ベッタリと血液が付着。ええつ誰の血よ。ああ僕のか。

僕が無理に首を捻つて後ろを見ると、今までどこにいたのか姿の見えなかつた、キジムナー氏の妻でありマリネさんの母でありハルキ氏の義母でありミキちゃんとルナちゃんとタカヒト君の祖母でもある北条キンさん（88歳、米寿）が、物干し竿の両端に穴あき包丁を一本ずつ括りつけた槍状の武器を構えている。片方の包丁から滴つている赤いは僕のヘモグロビンの色。なんだかんだで僕つて結構ダメージ負つてない？

律儀に鼓動のリズムに合わせて傷口から血液が溢れ出る。

戦闘不能になつた僕は、とどめを差されるのを待つばかり。

だけど、もう誰も僕のことなんぞ眼中にないようで、それぞれの闘いを続けるのだろう。

僕は、手で這つ。腕で這つ。肘で這つ。顎で這つ。顔で這つ。鼻で這つ。

縁側に向かう。縁側には、沙希に殴られすぎて鉄鍋が変形し、頭から取れなくなつたハルキ氏が座つている。沙希は、妹はそこにいない。別の戦闘に加勢しに行つたのだろう。ハルキ氏は、僕の這うズリズリという音を聞き、こちらに顔を向ける。鍋の縁で片目が塞がつている。鼻血が出て、頬骨が変形していて、唇が切れていて、ずいぶんと酷い有様だ。

「刺されたのかい？」とハルキ氏。

「ええ。貴方のお義母さん、なかなか非道つすね」と僕。

ハルキ氏は、だろうと黙つて笑う。僕は縁側でグッタリする。

ふと外を見る。向かい側に、僕の……大熊家の家が見える。

「なんで戦つてんすかね、俺たち」と僕。

「それはあれだよ、君たちがさ、ほら……えつと、なんだっけ？」
とハルキ氏。

僕は思い出す。僕の飼い犬の吠え声が五月蠅いと、文句を言つた

来たキンさんの怒声を。

家の犬じゃありません、となりの川上さんのところの犬でしきうと話す母の困惑した顔を。

僕の家の犬がある日突然全身に打撲を負つて帰ってきたことを。

その2日後、家の盆栽がことごとく粉碎されていたのはお宅の仕業だらうと無表情で詰め寄つてきたキジムナー氏の皺だらけの口元を。

私たちじやない、そんな言いがかりは止める、貴方たちこそ、家の犬に怪我をさせたでしょうと言つ祖父の充血した目を。

それから、僕の家の窓ガラスが割られ、北条一家の所有する車に傷がついた。

えつと、それで、どうなつた？

どういうわけで、どうなつた？

五月蠅かつたのは僕の犬なのか、僕の犬に怪我を負わせたのは北条一家の誰かなのか、北条キジムナー氏の盆栽を粉碎したのは僕たちの誰かなのか、僕の家の窓ガラスを割つたのは北条一家の誰かなのか、北条一家の車に傷をつけたのは僕たちの誰かなのか、そのどちらが明確になつたら戦いの理由が分かるだらう？

分かるわけないね。戦いつてのはいつもそういうものだ。理由があるから戦うんじやない。戦いがあつて理由がついてくるんだ。そういうものなんだ。そのぐらい、誰でも知つてる。

今日の朝、ゴミ捨て場で一つの諍いが起つた。僕の母と、北条キンさんの間で。母がゴミを出すと、キンさんがその中身を見咎め、「燃えないゴミは今日じゃないわよ規則は守りなさいよね」のテクノボウと言つた。母は、この弁当パックは一見燃えないゴミに見えるけれど実は可燃性の素材を使用しているのだから燃えるゴミとしてだしても問題はないのだそんなことも知らんのかしらオホホと言つた。そのオホホという最後の笑いが気に入らなかつたキンさんは、母を罵倒し、母も応戦した。「そもそも紛らわしいんじゃアホ」「人んところのゴミ一々確認すんなボケ」「規則を守らせる為に誰かが憎まれ役でもやらんと駄目なんじゃカス」「勝手に憎まれてろタ」「燃えないゴミ燃やしたらどうなるかわかどんのかダイオキシンの恐ろしさを知らんとかトンマ」「燃えないゴミはただのゴミだマヌケ」「理屈にもならんことほぞくなテクノボウ」「OK!もう殺す」「ヒョメオナ! 殺してみい」

例え、今朝、この諍いが起つらなかつたとしても、いざれこの抗争は勃発したことだらう。

「阿呆ですよね」と僕。

「え、なにが」とハルキ氏。

「全部。俺も貴方も含めて全部」と僕。

「そうかな」とハルキ氏。

「そうすよ」と僕。

「口りと仰向けになる。背中が痛む。傷が圧迫されて、血液がジ

「つと染み出していく。

室内からは怒号と悲鳴と破壊音との他諸々。

屋根の切れ端からは相変わらず、雲ひとつ無い青い空。今日はない日だ。んなわきやあない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0221f/>

家族

2011年1月10日05時22分発行